

昭和十三年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年一月廿日印刷 昭和二十三年二月一日發行

第十四卷 第二號

淨土

二月號



法然上人鑽仰會發行

睡眠の時十念を

唱ふべしと云ふ事を

阿彌陀佛と

十聲唱へて

まとろまん

なかさねふりに

なりもこそすれ

——法然上人——

目次

罪……………(二)

浄土の存在について(五)……………(三)

中村辨康

一莖の草一羽の鳥……………(八)

吉田絃二郎

お稻荷さん……………(一〇)

小田切泰道

隨想……………(五)

世相漫筆

栗原 茂

信仰相談……………(一三)

中村辨康

童話雪すべり……………(一四)

増山一彦

編集後記……………(一六)



淨土の存在について (五)

中 村 辨 康

第五章 淨土とは？

淨土は佛の世界のことであるから、如何なる佛にも淨土のない筈はない。無量壽經に依ると、法藏菩薩が世自在王佛にお願ひして「二百十億」と云ふ澤山な淨土を拜がませて頂き、その中の殊妙なるものを選んで衆生の爲の淨土完成の志を起し、それを四十八の誓願にまとめてその成就を期したことが説かれて居る。

また觀無量壽經では韋提希夫人がお釋迦様に淨土を拜がまして頂きたいとお願ひすると、お釋迦様は眉間の光を放つて十方無量の世界を照し給ふた。その中には七寶合成の淨土とか純蓮華の世界とか自在天宮の如き世界とか玻瓈鏡の如き佛土とか其他「無量の諸佛國土の嚴顯にして見つべきもの」があつたが、韋提希は「是の諸の佛土清淨にして皆な光明ありと雖も我は今極樂淨土を」拜みたいと云つて阿彌陀佛の淨土をお願ひして居るが、こ

のやうに經典には無量の淨土があると説かれて居る。然しその多數の淨土の中で最も優れて居るのは「阿彌陀佛の淨土」である。それは無量壽經に云ふ如き「無量の佛土の綜合された淨土」であるからであつて、諸佛の淨土の特長は皆なこの中に包含されたのである。それ故阿彌陀佛の淨土と諸佛の淨土との光明の差は、星と太陽との比較の如きものであらう。

かくの如く諸佛に夫れ々々淨土があると云つても、地球上に色々な國があるやうにあるのではなくして、私達の間にも商人には商人の世界、學校の先生には先生の世界があるやうにその人の教養に依て意識する世界で、有限的な物的存在ではないのである。謂はゞ佛の「自覺の世界」である。それ故それ々々の境遇に依て異なる修行と教養とで得られた酬因感果の世界であるから、一佛に一淨土があつて然るべきものである。かの釋迦牟尼佛の淨土は靈鷲山を中心とせる此の娑婆世界と一體である。

しかもこの娑婆に居る我々凡夫には同じ處でありながら感得の出来ない佛界である。それは要するに佛としての自覺の世界と凡夫としての自覺の世界との相異に過ぎないのである。所謂「一水四見」である。即ち一つの水が人間には水、魚には空氣、餓鬼には火、天人には瑠璃と見えると云ふのと同じわけである。即ち諸佛の淨土は、諸佛それぞれの悟の世界である。だから報土とも云へば法性土とも云へば寂光土とも云へば密嚴淨土とも云へるのである。

然るに阿彌陀佛の淨土はさうではない。無量佛の綜合が阿彌陀佛であり、十方無量佛土の綜合が阿彌陀佛土なのである。それは大經に依れば二百十億の佛土の殊妙を綜合したる世界であり、四十八願に依て表象されたる世界であるが、阿彌陀經には西方の一方だけでも過十萬億佛土と云つて居るから、之れを十方に考へれば過百萬億佛土ともなつて、結局は太宇宙全體として想定され得るものである。何となればそれは綜合であるからであり無量と名付けられるものであるからである。

それは場所的存在ではなくして、生活する、生きる世界である。諸佛の淨土は聖道門的修行に依て捷ち得る世界である爲に、凡夫の往生を許さない。隨て戒定慧三學の完成に依て煩惱を斷盡し、法身を證得しなければならぬのである。

之れに反し阿彌陀の淨土は、綜合の世界であり、本願

大意志に依る世界であるから、阿彌陀の信仰に生き得るものであれば誰でも往生は可能なのである。と云つて之れは觀念の世界でもなく知識の世界でもない。一枚起請文にはハツキリと「觀念でもなく悟りでもない」と云つて居り、「唯だ信するまゝに南無阿彌陀佛と稱へるもの」のみの往ける世界であると、云つて居るやうに、阿彌陀佛と共感し共生する信仰の世界である。朝な朝な如來と共に起き、夕な夕な如來と共に寝ぬる世界であり生活である。

若し阿彌陀佛の淨土が物的存在であるならば私達は到底往くことは出来ない。何となればこの身體は地球に縛られて居るからである。イヤからだが行くのではない心が往くのだと云ふならば、それは觀念の世界であるからものを思ひ得る現在だけの通用でしかない。また若しその心と云つたのは「靈」だと云ふならば、その靈は私からだの何處にあるのであらうか。そしてその靈の往く靈界は宇宙の何處にあるのであらうか。結局は「信仰」か「執着」かの二つの外はないことにならう。

若し「物的存在」だと固執するならばそれは遍計所執と云はるゝ執着の世界であるから、佛の世界ではない。迷ひの世界である。たとへ自分は信仰だと思つて居てもそれは少くとも非佛教である。

如來様は生きる大生命でまします。隨てそのお淨土も生きる大生命の世界でなくてはならない。隨て私達が南無阿彌陀佛に依て生きるならばいつでも往生は可能なのである。それ故にこそ「一念に一度の往生を當て置き給へる願なれば念々毎に往生す」と云ひ得られる譯である。南無阿彌陀佛。々々々。



世 相 漫 筆

栗 原 茂

終戦後、混亂した世相を、むき出しに露呈しているのは、東京の上野の地下道と數寄屋橋界隈であらう。上野は、敗戦の犠牲になつた生活不能力者や浮浪兒の巢窟であるが、ユモ一枚に親子くるまつてふるえている可哀そうな者もあれば、かつばらいや場所とりの浮浪兒、春をひさぐうす汚ない闇の女、煙草のすい殻を巻きなす者など、人生のどん底におちた人々の群れでひしめきあつてゐる。彼等の發する吐氣を催すような臭氣は、そのまま瀾濁した敗戦日本の體臭を思わせる。

これにくらぶれば、數寄屋橋界隈は、銀座をひかえてゐるだけに、陰慘さはないが、人目をうばうような事件が、次々にくりひろげられる。しかし、その事件が全く相反した様相をとつてゐるところに今日の混亂し分裂した日本のあがきを看取することができて上野と一脈通ずるものがある。

昨年早春、總選挙の行われる直前の數寄屋橋界隈は、けんらん

目をあざむくものがあつた。

赤旗をかざして共産黨を謳歌するすぐそばでは、天皇制護持を絶叫する中年の紳士があり、すこしはなれた所では、血書の大はいをひるがえしながら「在滿ソ同胞即時歸還促進運動」のために、聖雄ガンジーばりの斷食に、やせ細る肉體をものともせず、精神で頑張る男がいる。さらに歩をのばして有樂町驛附近へ行くと、ヤミ市で晝間から顔を眞赤にして、札タバを切つてゐるインフレ成金があり、夕闇せまる頃ともなれば、ガード下に闇の女がむらがつて、いわゆる彼女等のラク町を現出する。右と左、心に生きる者と物欲にとらわれる者、そこにはなんの脈絡もなく、混亂した日本の姿を、そのまゝむき出してゐる數寄屋橋界隈であつた。

昨年の暮になると、インフレ昂進を反映して、數寄屋橋風景も一變した。社會事業共同募金に黄色い聲をあげてゐる女學生のそばで、學資をかせぐ大學生や女專生が南京豆や寶クヂを賣り、すこしはな

れた所では傷夷軍人が生活資金を乞うていた。しかし一ばん繁昌したのは實クデであつて、共同募金は頗る不成績であつたし、共同募金の枠からしめ出された傷夷軍人も、余り省みられなかつた。インフレにあえぐ日本では、自分の生活がやつとで、他を省みるゆとりはないのであろうか。川一つ越えた日劇はえんえん長蛇の列をなしていたし、東劇の師走興行にこそ人足も、かなりしげかつたし、表戸を閉めた料理店では忘年會が裏口營業で繁昌していた。インフレの昂進は、ますます貧富の差をばげしくする。まじめな中間階級が没落するに反して、ずるくたちまわる闇利得者は、雪だるまのようにヤミ太りする。よつぽどしつかりしていないと、インフレに足をさらわれてしまうので、自分の生活を守るだけで精一はいの中堅層には、他を省みるひまはない。欲にかたまつたヤミ利得者には、他人の貧窮をみる心は微塵もない。スイスの高德な牧師が「與えよ、取れよ」と書きしるした札をかゝげて、社會事業共同募金の端緒をひらいた温い宗教的な愛は、日本の殆んどすべての人々から見失われている。師走の數寄屋橋にたつて、そこに見せつけられるものは欲にとらわれた淺ましい人間の姿であつた。

ところで、この數寄屋橋に、最近珍らしい出來事があつた。

二月十日の晝下りであつた。ひげぼうぼう、髪ぼうぼうの五十餘名の僧侶が、見事にそろつた木剣をかざし、肉太にしたゝめられた

七字の題目を風にひるがえしながら、音吐朗々と法華經を誦しはじめたのである。そばにある急造のかまどには二石入りの大釜がかけられて、お粥がぐつぐつ煮立つている。

突飛な事件にも、ものおじしない銀座マンも、これにはさすがに目をみはつた。何事が起るのかと思わず歩をとどめた。

汚で鼠色に變色した白木綿の下着、破れ傷んでいる麻の袈裟に身をかためている異形の僧侶たちは、銀座マンの驚きにも頓着せず、一心に經を誦し、世界平和と日本再建のために祈願しつゝけた。

一時半に祈願會は終つた。いつの間にか周圍は身動きもできないほどの人だかりになつていた。僧侶たちは煮たつている大釜から甘粥を茶碗にゆすり、道行く人々に供養しはじめた。ひげぼうぼう髪ぼうぼうの顔の中には、目がやさしそうに輝き、唇が微笑でほころんでいる。供養をうける人も、今までの數寄屋橋では發見できなかった、にこやかな態度で茶碗をうけている。かくして約三十分の短い間に、約二千人分の甘粥が供養された。荒さんだ世の中に珍らしくも温い法悦がたゞよつた。どろ沼に咲き出でた蓮の花にもにて、なんとなく清らかな眺めであつた。

これは千葉の法華經寺で初の荒行を成じた五十四名の荒行成滿の記念供養であつたが、道行く人に供養した粥は、彼等が行中三日間、

世界平和と日本再建のために斷食祈願して残した、尊い白米一俵分をつぶしたものであつた。

貧窮者に食を施すことは、食事情がひつぱくしているだけに、最も大きな慈悲行である。それに間違いはない。しかし主食はじめ重要な食料が配給されている現在では、しかく簡単にこの慈悲行も許されない。配給量が充分でないので、人に施すには自分の食い分を割愛しなければならない。従つてどうしてもヤミ經濟にたよらねばならない羽目におちいり、施せば施すほど、ヤミ經濟を助長することになる。現在の社會事業の困難さは、かゝる物資不足に原因しているが、それほど微溫的な慈悲行ではどうにもならないほど、社會は複雑化している。

しかし、この施粥は自分の食糧をさいたものであるから、そんな後めたさはなく、溫い宗教味があふれていて、教寄屋橋畔になごやかなふん圍氣をたゞよわした。恐らく多くの人に深い感銘を與えたことであらう。

たゞ私は、その瞬間、次のようなことを考えた。しかしこれはあくまで私見であつて、とるに足りないものであるが、私が從來から

いだいてゐる佛教界に對する希望である。

佛教界には、ほんとに宗教的愛（佛教で言えば慈悲であらうが）からはとばしる社會事業が少いようである。坊さんが仕事をやれば、すぐ宣傳の方が先になるようである。これはどうしたことであらうか。キリスト教徒の中には——特に信者に多いが、神の愛に生き、そのもゆるような信仰によつて、献身的な社會事業をやつてゐる人を、時々見かける。神と共にあるので、その仕事に人に認められようが、認められまいが、問題ではない。従つて宣傳などはしない。一婦人の努力による鷺の宮の浮浪兒收容所「愛兒の家」などはその最も代表的な例である。社會事業はこの内からあふれる愛につらぬかれねば、かえつて有害となるものである。

荒行僧の施粥は誠に立派な供養であつたが、もしも、これが人目のつかないところで、ほんとに毎日の食に困つてゐる人々に施されたとすれば、その徳行は一そう光つたであらうと思う。宗派宣傳の一つに用いられたとしたら、あたらしい白米も台なしである。私は荒行僧の施粥の動機にこれがないことをひたすら念じて、橋畔を去つていつた。



一莖の草一羽の小鳥

吉 田 絃 二 郎

日暮れころ近くの農村を歩いてゐると三匹の犬が數羽の鶏を追つかけてゐた。やがて一匹の犬が眞つ白な鶏を銜へてしまつた。鶏も綺麗な鶏であつたが、犬もまた長い耳の垂れた可愛い、小犬であつた。鶏を銜へて尾を振りつゝ畑の間を走る姿を見てゐるといかにも得意さうであつた。

わたくしは直ぐ近くの畑に働いてゐた農夫に教へてやつた。農夫は棍棒を搦んで犬を追うた。

こゝでわたくしの同情は鶏から犬の上に移つた。一刻前まではわたくしは鶏を助けたい一心であつた。しかも棍棒を搦んで犬を追ふ農夫を見た刹那、わたくしは犬を助けたい一心になつた。

幸ひにも鶏は附近の子供の手に救ひ出された。子供に叱られた小犬は素直に銜へてゐた鶏を口から放した。

さわぎを聞きつけて五六人の若者たちが駆けつけて來た。中に獵銃を提げた男があり「犬の奴、鐵砲で殺してやるべえ」といひながら木立の中に走り込んだ。

わたくしは、もうそれ以上の光景を見るに忍びなかつたので、小急ぎに村落を離れて行つた。わたくしは遠ざかりつゝも銃聲を氣にして歩いて行つた。

五六町歩いて行つたところで、つゞけさまに二發の銃聲を聞いたが、大分見當がはずれてゐた。恐らくそれは他の獵夫たちの小鳥を撃つた銃聲であつたらう。わたくしは小犬のためによろこばざるを得なかつた。

日が暮れ、武藏野の原には月が出てゐた。

わたくしは犬のことを考へ、白い鶏のことを考へつゝ歩いてゐた。鶏は無論可哀相である。しかし本能のまゝに動かされて行爲し、子供に追ひつめられて素直に鶏をかへした小犬を憎むことはできない。

たゞ不愉快に思はれるのは棍棒を搦んで走つた男、獵銃をかゝへた男である。日本民族の心の裡に潜んでゐる残酷な血である。これは何としてもわれわれ日本民族の心から一日も早く淨めなければならぬ。

鶏も小犬も天國のものである。人間のみが地獄のものである。

ウィルアム・ブレイクの詩に虎が羊を襲ふ悲しい事實をうたつたものがある。

飢えたる虎は本能的に羊を襲ふ。悲しむべき動物の本能的運命である。神の攝理の矛盾である。しかもブレイクにはこの悲惨な宿命は直ぐに解決されてゐる。即ち神は涙を流し飢えたる虎をあはれみ給ふとともに、虎に襲はれた小羊を一層幸福な天國へ迎へ給ふといふのである。

犬、鶏、人間の場合、人間のみが修羅を燃やしてゐる。人間がもし神の心、佛の慈悲心を持つてゐたら、犬も鶏も、人間自身も救はれるであらう。

わたくしの庭には、武藏野に飛んで来る鳥といへば大抵は訪れて来る。目白、雉子鳩、小壽鶏、懸巢、青しとど、ひたき、四十雀、のじこ、かしらだか、鶯、頬白、鶉、鶺鴒、三光鳥……そして夏になれば郭公、筒鳥の聲を聴くこともある。

しかもたび／＼わたくしの家に來て一度も鳥の聲を聴かなかつた茶人といふ種類の人があつた。鳥はいつも庭の木立に鳴いてゐたのであつたが。

わたくしは茶人と自ら稱してゐる人達の間に、この種の人の存在を否定することはできないことを知つてゐる。茶を點じさへすれば茶であると考へてゐる。

ものいはぬ畜生を可愛がること、畜生にも一石一木にも佛の慈悲があり、佛心が宿つてゐることを感じてこそ茶道とはいはれる。

一本の草にも、小鳥にもやさしい關心を持つほどのこまやかな情を養ふことが、お茶をたてるよりも大事なことである。



お 稲 荷 さ ん

小 田 切 泰 道

劇場には大ていお稲荷さんというのがまつつてある。日本人は簡単に何でも神さまにまつりあげてしまうので、私は永い間、どうして狐をまつつてあるのかと思つていたが、このご神體はコシコンさんではなく、一寸名前は失念したが、何々のミコトという何か經濟をつかさどる神さまだとのことである。なるほど、そういえば、劇場に限らず、商賣をするところには、よくみかける。近代建築の粹を極めたデパートの屋上の一隅にも、およそ近代建築には似つかない赤い鳥居や小さなヤシロがチヨコンと設けられている。

松竹系の劇場には、必ず樂屋の入口近くにこのお稲荷さんのミコトをまつる神棚があり、初日には灯を入れ、お供えものをする。従業員は大入満員を祈念し、大入になると、眞ッ先に大入祝を奉るから、この神棚には大入袋がベタ／＼と貼られ、ぶら下つている。

もう一と昔以上になるが、事業王小林一三が東寶なる演劇會社をつくり、東京では今、アーニーパイル劇場となつている東寶劇

場や、有樂座等、大阪には北野劇場や梅田映畫劇場などと主なる都市に大劇場をたて、永年一人舞台をほしいまゝにしていた松竹芝居王國に對抗して、劇界に新風を吹入れた。

芝居道の因習とまでなつている祝儀萬能の習慣をテッパイしたり、樂屋口にイカメシイ守衛をおいて訪問客を整理したりした。この邊の新風はまあ良い方であるが、どういふわけか日本の芝居の特長の一つであるあの花道というものをやめてしまつた。そのくせ樂屋にはやはりチャンとお稲荷さんを祀ることを忘れなかつたから妙なものであつた。

もしお稲荷さんを祀らないで、客がちつとも來ないと營業が成立たないと思つたからか、或いはまた、古い頭の俳優にも出演してもらふ時があるのだから、この人たちが拜むところがないと不便を感じるであらう、という老婆心からだつたか、その邊のところはつまびらかではない。ともかく、これもまた稲荷は他の神さまと同じように、家内安全、特に商賣繁昌の對稱にすぎないことに間違いない。

樂屋といえは、新國劇に丸茂三郎という俳優がいた。(すでに彼はいた——となつた。第二國民兵で海軍に應召後、消息が絶えてなかつたが、昨年に至り、ついに比島で戦死した旨公報があつた。)

彼は歌舞伎俳優松本某の實弟であり、彼もまた子役時代は歌舞伎で育つたのだが、少年時代から新國劇に入座し、故澤田正二郎座長によく可愛がられて成長した。

彼は因襲の色濃いつた歌舞伎出身であり、その藝域も現代劇よりはマゲモノの方が光彩を放つていたし、また私生活も洋服より和服の方をより好む方で、しぜん書生氣質の俳優の多い新國劇の中では、いわゆる「役者」らしいタイプとして特に目立つていた。

その丸茂が、樂屋のお稻荷さんに手を合わすことをしなかつた。

そのかわり(であらうと思われるが)、彼は舞台へ出る前には、必ず一瞬目をつぶり、「澤田々々々々」と三度口の中で唱えて登場した。入座したての若いインテリ研究生にはこれがしばらくの間何の事だかわからなかつたそうだ。わかつたとしても、おそらくはこのオマジナイを、輕視し、或いはべつ視したかも知れない。この劇團の創設者であると共に、當時の劇界の革命兒的存在であつた澤田正二郎の偉大さ——といつたようなものは、聞かされもし、讀まされもしていたであらうが、その澤田と舞台、樂屋等の生活を共にした丸茂の境地とは全く異なる環境にあるわけだからこ

れも無理はない。

この「三言の唱名」は簡單であるが、丸茂にとつては意味が深い。即ち「故人の靈よ、願わくはわが藝を見護り給え、この舞台われに過ちなからしめ給え」といつたようなひとつの精神統一であり、自己への激勵叱咤の聲であつたろう。

澤田を知らない研究生が、いくら「澤田々々」をくりかえしても、果してその効果はあるであらうか。あるともいえるし、また無いともいえよう。即ち、肯定し、信ずるものには絶對に在り、否定するものにはもとよりあろうはずはないのである。

こゝに信仰が生れ、宗教が存在するのではなからうか。

さて、わが國における佛教の傳統は古い。各宗各派さまざまで一宗また細胞のごとく分裂して盛觀の極みである。その他キリスト教をはじめ、曰く何々教、何々教、まさに百花リヨウランの華やかさである。

いずれにせよ、自家の繁榮をのみ祈るような祈りかたはしたくないし、それを賣りものにするような宗教は欲しくない。

願わくはわが「生活の舞台」に過ちなからしめ給え。今日一日のわが言動を見まもらせ給え。——と朝な夕な心から祈り、反省できる宗教が欲しい。そしてそれが、かつての神道の如く強制されるようなことなく、自由で、しかもくにたみを擧げて同じ方向に祈りの手を合せられる眞の宗教であつて欲しいと切に思うのである。

信仰相談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

壇 中 村 辨 康

念佛すれば往生が出来るか

(問)

南無阿彌陀佛を稱へさへすれば、淨土に往生すると云ひますが、一度でも二度でも稱へたらそれで往生が出来るのでせうか。(福岡・築上・市丸・種田 圓侃)

(答)

出来るとも云へるし出来ないとも云へます。何故なれば「唯だ稱へる」と云ふことに二通りあるからです。純な氣持で教へられるまゝに素直に信じて唱へたが、そのまゝで命終した場合などは無論往生可能ですし、眞宗の信者の人のやうに一念唱名の後は「御禮報謝」の氣持で念佛する人もまた往生可能ですが、俗に

「本願ばかり」と云つて「一念で往生が出来る」と云ふからあとは何をやつてもよいのだと思つたり悪人正機だからむしろ悪い事をする方が可能性が多いのだと考へたりするのは信仰を曲解して居るもので、世の中に善惡を流すことであるから、そんな人は絶対に救はれません。不良少年が「お父様惡うございました」と一度あやまつたら、それで今までのことが帳消しであるばかりでなく、これから後は悪いことの仕放題と云ふのは「あやまつた」があやまつたにならぬと同様のことです。あやまつてもあやまつてもあとからあと

から惡癖が出て来る場合を考へて下さい。人間と云ふものはこうした場合ばかりです。一度あやまつたら絶対に改心したと云ふ人は誠に稀れであります。さう云ふ人もたまにはあり得るでせうが、極めて稀れたことを以て標準とするこ

とは出来ないでせう。私達は中々さう行きません。それ故本來の生活を懺悔する上からも不斷の念佛が必要となるわけです。稀れた人の場合と多くの人々の場合とを混同して稀れた人のことを標準に考へるのは誤りでせう。

(問)

地獄極樂・靈魂三世業感因果等々

釋尊の教を信奉する者は誰がどう云はうと信を動搖させるやうなことはありませんが、禪宗などでは淨土宗で云ふ地獄極樂は人の心の中にあるので死後に存在するのではない。また人の魂は死と共に滅びるもので魂だけが畜生になつたり餓鬼になつたり人になつたりするものではない

と云ふさうであります。私はかゝる説をなすものは外道でこれでは因果の法則に合はない。若し三惡道がなければ何んな悪いことをしても差支へないことになります。聖道門も淨土門も道こそちがえ根本は佛の教であります。靈魂の不滅を信じ生死界を脱がれる爲に佛道を修行するのであつて、この

三世業感とは佛教共通のものと思ひます。法然上人や親鸞上人が始め道を求むる爲に煩悶焦躁されたのもこの得脱の爲ではなかつたかと存じます。釋尊は一代の教の中淨土の三部經に地獄極樂の存在や靈魂の不滅三世業感の因果觀を説きながら他の經に之を否定されて居るとは何う云ふ譯でせうか。これ等の點につき御解説仰ぎたうございます。(京野・東山・今熊野・高山與)

(答)

觀無量壽經の中に「諸佛如來は法界身なり一切衆生の心想の中に入る。是故に汝等心に佛を想ふ時是の心即ち三十二相八十隨形好なり是の心佛を作る是の心是れ佛なり」と云ふ言葉があります。之れを眞言宗や禪宗などでは「唯心の彌陀、已心の淨土」の根據として居ますが、善導大師は逆に指方立相の根據として居て唯心とか已心とか云ふ觀念論的見方をして居りません。即ち三十二相八十隨形好の具體的相形を

立てることこそ衆生を救ふ善巧方便であり佛の大慈悲であるとして居ります。如來様は在まざる處はないのですから、無論人々の心の中にもあります。事實心でなくでは思ふことも感ずることも出来ません。だからと云つて心の中だけに限定すべきものではありません。また相として相ならざるはなき無量相佛で在すのですから、三十二相八十隨形好のみに限定する必要もありませんけれども、その形相までをも唯心だの已心だのと云つてしまふのは誠に偏頗であります。

また靈魂の問題ですが、佛教では業力は認めますが靈魂の有無に就ては何とも云つて居りません。また因果をも説きますけれども、それは盾の半面であり幼稚なものへの教訓として用ひられるもので正しくは緣起論に立つものであります。緣起論も低い處では業感緣起ですが、段々進んで賴耶緣起眞如緣起法界緣起六大緣起等と發展

し佛教の心理學や哲學を生んで居ります。また因果の法則とは云ひますが實際は必ずしもその法則通りには行きません。小因大果無因有果他因自果は因果の法則では絶対に許しませんが事實はかう云ふこともあり得るのです。ことに淨土教の信仰ではこの因果律の反則が是認されて居るのです。

また淨土三部經に地獄極樂の存在や靈魂の不滅三世業感の因果觀を説いて居るとの事です。三部經の何處に説いてあるのでせうか大經の五惡段の處には五大惡五痛五燒を説いて居ります。然しそれは靈魂が獄所へ行つて苦を受くるのではなくして、私自身が自然の三途にあつて苦を受けつゝあるものであつて、それは迷ひの世界での

出來事を云つて居るのであります。尙ほ三世業感と云ふお言葉ですが昔は十二緣起を三世に配當して因果關係として説明して居ました之は主として支那での解釋だつたのですが、明治になつて梵本が來た爲に原始佛教の研究が盛んになり宇井博士とか木村博士とか云ふ人達が研究の結果業感緣起は三世に配當する因果的解釋をするのは誤りであつて、老病等の苦は無明行識等の爲に起るものであるとの素直な緣起觀であることが分つたのであります。

以上であつたの御考への中には色々混雜があつて正しいところと正しくないところとが入り交ざつて居ることにお氣付きのことと存じます。

新刊豫告

中村辨康著 (淨土叢書第一輯)

法然上人とその信仰

菊半截約七十頁 豫定價二十圓(送別)

混沌たる社會へ心の糧をおくりたい念願にもえて「淨土叢書」の發行を企圖しました。これはその第一集であります。中村先生の思想及び文章については今更ちようちようする必要はありません。簡にして要、よく一小冊に法然上人の全貌を遺憾なく盛つた書き下ろしの新書です。部數に制限がありますので早くお申し込み下さい。

發行所

法然上人鑽仰會

童 話

雪 す べ り

増 山 一 彦

電車はスキーを持つた人で一ぱいです。猛は、スキーを持たないのが、なんだか恥しいような気がしました。

「日曜だから、みんなすべりに行くんだな。」

お父さんは、目鏡の奥で目を細くしながら、おつしやいました。

「僕もすべりたいなあ」

「そりや無理だな。平たい所であんなにころんでいたんじやないか」
猛は昨日お父さんに連れられて、生れてはじめてこの雪國に來たのです。二尺も三尺もつた大雪が珍らしくて、心がわくわくしました。雪の上を歩くと、づぶりづぶり、股まではいるので、伯父さんちのスキーをはいてみましたが、すべれるどころか、ころんではかりいしました。でもころぶのが、とても愉快です。ぼたりぼたりと倒れて、眞白い雪の中に、スキーのあとや、からだのあとをつけるのが、とてもとても嬉しいのです。

「今年はだめだが、來年はすべれるようになるよ。参考のためにスキー場を見て來たら……。」

伯父さんが笑いながら言つたので、猛はもう夢中になつてお父さんを責めたて、とうとうスキー場に行くことになつたのです。

「さあ來たよ」

スキーをかついだ人についてスキー場に上りはじめました。スキーを持たないのは、猛とお父さんばかりです。急な坂を息をきらしながら上つてゆきました。お父さんは、すべりおちないように、四つんばいになつて上ります。猛はそれがとてもおかしくて、だらしないなあと思ひました。しかしお父さんは、はあはあえきながら、一生懸命です。

「お父さんも年をとつたなあ。息はきれるし、足は重いし」

そう言われると、わざわざ連れてきてくれたお父さんの親切さが胸をうちます。山の上に出た時は、汗びつしよりでした。お父さんは道をよけて一休みしました。スキーをかついでいる人たちも、汗をふきながら歩いてゆきます。

「お父さん、先へ行くよ」

猛は早くスキー場へ行きたくて、お父さんをほつたらかしてかけ出しました。

スキー場は山の斜面ですが、すぐ目下には、温泉場が見え、その向うには日本アルプスの連山が、おおしくそびえています。

廣いスキー場を、人々はたくみにすべりまわっています。山の中腹から雪をけたてて、勢よくすべつてきては、猛の前でびたつととまる人もあります。子供たちは、すぐ目の前で、軽くすべつています。

「猛、すべりたいだろう」

「うん、野球も面白いが、スキーは一そう勇ましいね」

進駐軍の兵隊さんもすべつていますが、なかなかいいかつこうです。猛はうつとりと見とれていました。

「伯父さんのうちで、うんと練習するんだね。そして來年はここですべるんだね」

「ほんと？」

「ほんとさ」

猛はうれしくなりました。來年はみんなに負けないように、うんとすべつてやるぞ、足がむずむずするほど胸がおどりました。

粉雪がふつてきました。すべつている人はすこしもめげず、いや、かえつて元氣になつたようです。

「猛、寒くはないか」

「うん、ちつとも寒かないよ」

お父さんは小屋にはいつてゆきました。小屋の中には炭火が赤々ともえています。しかし、猛は降りしきる雪の中を勢いよくすべつていく人々に、うつとり見とれて、すこしも寒さを感じません。勇ましくりりしく見えて、血がわきあがつてきます。

「さあ、來年を楽しみにして歸ろう」

お父さんが小屋から出て來て、聲をかけました。猛は歸りたくはありませんでしたが、來年という言葉をきいて、すなおにお父さんのあとにつききました。

坂をおりはじめました。あんまり急な坂なので、小さな子がおりかけて、ためらっていました。

「お父さんが先に行つて、足がかりを作つてあげよう。二人とも氣を

つけて、ついておいで」

お父さんは、注意ぶかく雪をふみかためて降りをはじめました。足がかりを作らないと、ほんとにすべり落ちそうです。しかし一足おりのにたいへんな時間がかかります。猛はお父さんのすぐ後についていますが、まどろつこしくて、いらいらしてきました。

「お父さん、ぼくが先に行くよ」

「ばか、あぶない」

お父さんのとめる聲もきかずに、先へ出ました。だがやつぱりあぶなつかしいです。猛はちよつとひるみました。

「それ見ろ！」

お父さんがまた先へ出ようとしてました。猛はものすごい早さですべりおりてくるスキー場の人々を思い出しました。負けるもんか、はげしい勇氣が猛をゆすぶりました。雪にべたりとお尻をつけると、兩手で雪をかきわけながら、すべり出しました。急な坂なので、雪煙りをあげながら、すごいスピードですべつてゆきます。痛快です。お父さんはとつきの出來事でしたから、あつけにとられていましたが、小さな子も、猛をまねてすべり出しました。

猛はあつという間におりてしまいました。スキーですべれなかつた口惜しさも、ふきとんでしまいました。小さな子がまねたのも愉快です。勝ちほこつたようになつて、坂の上を見上げると、お父さんは、まだやつと中頃をおりています。おかしくてなりません。

「お父さあん、かつこうがおかしいや。思いきつてすべつておいでよ」

猛は笑いながら大聲で叫びました。お父さんもうとうとお尻をつけました。スルスルスルスル、見事にすべりおりてきました。

「とんだスキーになつたね」

お父さんは雪をはたきながら笑っています。

「でも、これでやつとスキー場に來たかいがあつたよ。とても痛快だった。來年はほんとのスキーだ」

猛ははちきれんような元氣で答えました。お尻の雪をはたくのも忘れていました。

編集後記

◇今年の供出状況は頗る成績がい。昨年の暮までに百%供出を完遂した縣は數縣にのぼり、續いて今年にはいり續々と完了縣が現れ恐らく期日の二月二十九日までに三千五十五萬石の割當を完了するものと見られている。

◇終戦後はじめての好成績で、明るい空氣が國中に流れ出した。衣食足りて禮節を知ると、古人は喝破したが、敗戦後、食糧が一切の鍵となつてゐる時、誠に喜ばしいことである。

◇百%供出が完遂されても絶對量は相變らず不足して食糧事情は急速に好轉しそうにもないが、しかし農家の人々が全力を傾けて供出に努力したという印象は國民に活力を與えるに充分である。胸をうつのは努力であり、誠意である。絶對量の不足もこの誠意によつて自ら満たされるであらう。生産増

強も、この努力によつて拍車をかけられるであらう。

◇春はもう目の前に來ている。明るい日本の訪れも間近かなような氣がする。暗い中に光りを求めて歩こう。希望の火を胸にもやしつゞけよう。私はいつもそんな氣でいるが、供米の好調は、なんといつても春の訪れを時候より一足先きに感じさせた。

◇今號には珍らしく吉田先生の玉稿をいたゞいた。何時もお多忙な中、しかもおからだの不自由なのをおして執筆していただくのが恐縮で、二三ヶ月遠慮申上げていた

が、先生は「浄土」のためにはどんなことをしても書くから毎月原稿をとり來てくれと申されて、なお一そう恐縮した。

◇栗原、小田切兩氏の玉稿もまた面白い宗教的讀物、前者は新聞記者、後者はもと新國劇にいた人で現在は雑誌の編集長である。愛讀を乞う。

◇「浄土」も印刷費の高騰と會費未納の多いため經營は四苦八苦である。どうか一人でも多く會員を勧誘していただく切にお願いする。(東)

江上秀靜 文
鈴木壽雄 繪

(B5大判三十二頁)
(全オフセット大色刷)

法然上人繪物語

定價六十圓
留八圓

新刊
戦後はじめて出た最も美しい繪本です。本會でもお取次します。御希望の方は前金御申込み下さい。

東京都中央区京橋一ノ二

發行所

法然上人繪物語刊行會

「浄土」二月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年一月二十日印刷

昭和廿三年二月一日發行

(定價五圓)

東京都港區芝公園浄土宗務所

編輯兼 中村 辨 康
發行人

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都千代田區淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人繪仰會

東京都港區芝公園浄土宗務所

振替 東京 八二一八七番

會員掛號 B 一〇八〇一四

會費 金六十六圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)

振替掛込みはすべて二圓五十銭増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年一月廿日印刷 昭和二十三年二月一日發行

浄土第十四卷 第二號

定價金五圓(送料五十銭)